

アフリカの人々と名付け 47

双子×双子＝副学長≡王様？

小馬 徹

湖間バントゥの双子名

前回は、ざっと世界の双子をめぐる民俗のあり方を概観したうえで、経済学者吉田昌夫の心楽しい経験談を借りて、ウガンダのガンダ王国の豊かな双子の文化複合の一端を紹介した。

ただ、その内容は必ずしもガンダ独特のものではなく、近隣の湖間バントゥ (interlacustrine Bantu) と呼ばれる諸集団の間にも類似の慣習と名付けが見られ、ガンダの名前の一部はそこから歴史的に借用されたものなのである。

自分自身がガンダ人であるンスイムビは、ガンダ人の双子の定式的な名前 (Waswa 男性初生児、Kato 男性次生児、Babirye 女性初生児、Nakato 女性次生児) のうち初生児のものはソガからもたらされ、ソガではそれらを各々 Waiswa、Babirye と呼ぶと述べた。そればかりか、かつてガンダと拮抗する強力な王国だったニョロの影響がまだ強かった時代には、ガンダのほとんどの土地で、Waswa の代わりに Isingoma が、また Babirye の代わりに Nangoma が使われていたと言う [Nsimbi, N. B., "Baganda Traditional Personal Names", *The Uganda Journal* 14 (2), 1950]。

ソガの双子名

1971-72年の期間ソガで参与調査を行った文化人類学者中林伸浩によると、ソガでは双子に与える定式的な名前は、初生児は男なら Waiswa、女なら Babirye、次生児は男なら Tenuwa、女なら Kauda となる。もう一度双子の出産が繰り返されて、それ以上の双子名が必要になった場合には、男児なら Lukata、女児なら Nakato と名付ける。(ただし、繰り返し生まれた双子がすべて同性だった場合には、二回目

に生まれた次生児に充てる特定の名前が足りない事になる。この場合に与える名前は不明)。

更に、双子の両親にもガンダと同様に特別の名前、つまり父親には Isabirye、母親には Nabirye という名前が与えられるのである——以上は、中林氏から直接ご教示を受けた。

副学長はガンダ王？

さて、前回の記事を思い出そう。吉田の知人であるマケレレ大学副学長 (ガンダ人) には三組の双子の子供があった。ただ、残念だが、これら六人の双子名は記されていない。私の知る限りの資料では、同じ家の三人目以降の同性の双子には特定の名前がない事になりそうだ。

また、吉田はウガンダ王の讃え名の一つに「ふたごの父 (Sabalongo)」があると述べた [吉田昌夫「アフリカのふたご」、松本脩作・大岩川嫩 (編)『第三世界の姓名』1994]。ただ、確かに *abalongo* は双子 (複数) を意味するが、*Sabalongo* は双子の父親一般ではなく、双子を二度生みなした父親に与えられる名前なのである。つまり「二組の双子の父」の意味だ。そして、それに対応する母親には *Nabalongo* という名前を与える。後述のように、ガンダ王は双子を二度生みなした父親にたとえられるのだ。

こう実情が判てみると、吉田が件の副学長に「『サロンゴ』と呼びかけると、彼は大変びっくりし、喜んだ」[前掲書] というくだりは、一層味わい深い。副学長は、日本人に *Salongo* と呼びかけられて、実際驚いたに違いない——二重の意味で。伝統的な文脈で彼に敬意を表すには、正確には *Salongo* ではなく *Sabalongo* と呼びかけるべきだった。彼はこの辺りは腹に収めて、吉田がガンダ文化に親しい思いを寄せている事

に素直に驚き、喜んだのである。

一方、「三組のふたごを持っていたから、彼の栄誉はなかなかのものであったに違いない」[前掲書]という推測は予想以上に正しく、正鵠を射抜いている。彼の讀え名が、まさしくガンダ王と同じく Sabalongo だからである。

オヴィムブンドゥでは

ところで、ガンダで「二組の双子の母」を意味する Nabalongo は、地理的にはやや隔たっているが、アンゴラ中西部のバントゥ語系のオヴィムブンドゥ人が三つ子の母親に与える Nelongo という名前に似ている。これに立ち入る前に、まず彼らが双子に与える名前を眺めてみよう。

オヴィムブンドゥ人は、双子の初生児を象 (onjamba) に因み Njamba、次生児をライオン (ohosi) に因んで Hosi と名付ける。三つ子なら初生児と次生児は双子と同じ仕方でも名付け、三番目の子供にはカバ (ongeve) に因む Ngeve という名前を与える。また、双子の次に生まれた子供の名前である Kasinda は osinda、即ち掘り進む獣の巣穴を塞ぐ土に因んでいる [Stewart, J., 1,001 African Names, 1997]。

そして、双子 (olonjamba) の母親は、双子を表す語に母親を示す接頭辞 na- を冠して Nalonjamba と呼ぶ。三つ子 (pl. elongo) の場合も、同様に同じ接頭辞 na- を冠した Nelongo という称号を与えるのである [前掲書]。

伝播と構造

さて、ガンダもオヴィムブンドゥも地理的には隔たっているが、共にバントゥ語を話す。初期のミッシヨナリーや旅行者は、今日バントゥ語と総称される言語とそれを用いる人々に漠然たる一体性を感じていた。この言語の名称に冠せられた「人」(複数)を意味する語の再建形 *bantu がその端的な指標となった。だが、今日では言語を超えた一体性の想定は慎重であるべきだとされている。実際、論理の体系である文化と因果連鎖の体系である社会を、また両者と

言語を相互調和的に捉える事には、論理的な必然性がないと考えるのが妥当である。

とはいえ、ガンダで双子を指す語 *omulongo* (pl. *abalongo*) と、オヴィムブンドゥで三つ子を指す語 *elongo* は近い。接頭辞を除けばほぼ同じだとも言えよう。また、ガンダで「二組の双子の母」を意味する Nabalongo と、オヴィムブンドゥで「三つ子の母」を意味する Nelongo は造語法も、また形態も確かに似ている。では、この事実をどう考えるべきなのだろうか。

王様と副学長

今ここで重要なのは、必ずしも語源や伝播の考察ではなく、両者が共に双子を特殊だと見なす観念をもち、双子とその親に特別の名を与える慣行をもっている事実の方である。

ガンダ語の *omulongo* (pl. *abalongo*) と、オヴィムブンドゥ語の *elongo*、またガンダ語の Nabalongo と、オヴィムブンドゥ語の Nelongo は、意味において似てはいるがズレている。つまり、前者は二組の双子とその母親を、後者は三つ子とその母親を意味する。注目すべきは、その論理のズレである。つまり、二組の双子という観念も三つ子という観念も、共に双子の多胎性を特殊視する観念の強調だと言える。だが強調の仕方が異なる。この場合、二組の双子は双子の多胎性の反復で、一方三つ子は双子の多胎性の拡大で双子性を強調しているのだ。

だから、オヴィムブンドゥでは三つ子は双子よりも遥かに特殊で強力な存在で、双子 (olonjamba) と三つ子 (elongo) は語彙としても区別される。いわば、三つ子は双子の二乗倍特殊なのである。他方、ガンダでは三つ子は双子と等価か、せいぜい「双子 + α 」である。他方「二組の双子の父」なるガンダ王は、双子が残余に対して特殊であると同程度に双子に対して特殊なのだ。Sabalongo は Salongo²であり、副学長氏は王に構造的に等価であった。そして、Nabalongo と Nelongo も同様に等価となるのだ。(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)